

# しまなみの遺跡

旧石器時代

兵頭

勲



旧石器時代遺跡の分布

しまなみ海道の開通から、はや一年以上が過ぎた。自身もしばしば橋を利用して島嶼部を訪れる機会があるが、そのたびに橋の雄大さと、人間の創造力の凄さをあらためて感じてしまう。この橋ができる以前の島への交通手段となると、当然のことながら、船の利用が必要不可欠となるが、それを必要としない時代もあった。

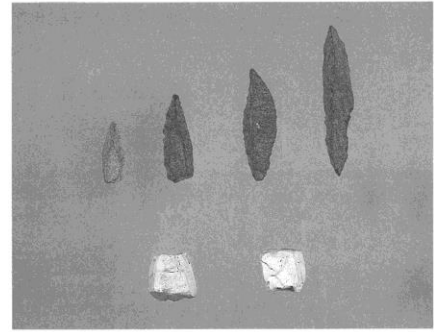
旧石器時代——地質学でいう第四紀・更新世に相当し、寒冷な氷期と温暖な間氷期が何度も繰り返して訪れていた時代であり、氷河時代とも呼ばれている。特に約二万年前は最も寒冷な時期にあたり、現在の年間平均気温と比べると約七〜八度も低い状態であったと考えられている。また、海面は氷河の発達によって100m前後も下がっていたため、最深部が約五十m前後である瀬戸内海は、船も橋も必要としない水草の繁茂する陸地で、低地を形成していたとされる。それを裏付ける資料の一つに、その当時、生息していたナウマンゾウなどの動物化石がある。ナウマンゾウは体長約四・五m、肩高三m前後の大きさで、約四十万



金ヶ崎遺跡の遠景

年〜一万五千年前まで生存していたと考えられており、その化石が北海道から九州まで約百三十カ所で確認されている。瀬戸内海海底から発見された化石もその一つであり、越智郡の大島沖などでは、ナウマンゾウやニホンムカシジカなどの何千点もの動物化石が、底引き網によって引きあげられている。このことは、その当時、瀬戸内海が陸地であり、同時に大型動物が生息していたことを証明するものである。狩猟を主体として生活を営んでいた旧石器時代人たちにとって、これらの大型動物は、厳しい自然環境を生き抜くための貴重な食糧資源であった。そのため、餌を求めて移動するナウマンゾウと同様に、旧石器時代人たちもそれらを追い求めて移動する生活を強いられていたと思われる。

その旧石器時代人たちの痕跡は県内各地で見られるが、越智郡島嶼部には、それらが集中的に確認されている地域の一つである。現在ところ、伯方町金ヶ崎遺跡をはじめ、岩城津波島遺跡や弓削町鯨遺跡など十一カ所で確認されている。そのほとんどが約二万年前の後期旧石器時



金ヶ崎遺跡で発見された石器（上：ナイフ形石器／下：細石核）



ナウマンゾウの狩猟風景模型/愛媛県歴史文化博物館提供

代の遺跡であり、標高三十〜五十mの丘陵上に位置している。瀬戸内海が陸地であったことを考えると、当時これらの遺跡は百m前後の高さの丘陵上に分布していたことになる。このように良好な眺望を備えていた遺跡は、狩猟対象の動物群の見張り場的な機能をもっていたと考えられている。しかし、本格的な発掘調査が行われていないこともあって、狩猟や動物の解体などに使われたと思われる石器が確認されるだけの場合がほとんどである。住居跡や石器の製作跡、炬跡などの生活ぶりを直接示す遺構は、いまだ発見されていないため、これらは推論の域をでることができない。

「石器」は旧石器時代人の狩猟生活を推察するための手がかりの一つであり、当時の人たちが使っていた石器の機能を明らかにすることは、その時代の狩猟生活を知る上で極めて重要なことである。では、当時の人たちはどのような石器を使って生活していたのだろうか。この時代の主な石器としては、ナイフ形石器、角錐状石器、尖頭器、スクレイパー、石斧、細石刃などがあげられる。そ



サヌカイトの原石（香川県金山周辺）

約三十点近くのナイフ形石器が発見されており、それを主体としていた文化の存在をうかがうことができる。またナイフ形石器のほかにも、島嶼部で唯一、ナイフ形石器文化に後続する細石核も発見されている。この細石核は、一万四千〜一万二千年前に使われていた細石器文化の存在を示すもので、長さ二cm、幅〇・五cmほどの細長い細石刃を作り出した残りの核の部分である。剥ぎ取られた細石刃は、木や骨に溝を刻んで埋め込み、槍先や小刀のように使っていたと思われる。

このような石器の大半は、サヌカイトと呼ばれる石材で作られている。サヌカイトは島嶼部からは約百km離れた香川県坂出市周辺で産出するものであり、加工が容易であることや、打ち欠くと貝殻状に割れて鋭い刃が生じるといった特徴を持つ石材である。そのため打製石器の素材として非常に適しており、その当時西日本各地で頻繁に利用された石材である。石材の選択は、狩猟生活に影響を及ぼしかねない死活問題であり、より良質の石材を求めて石器を作っていたことがうかがえる。

旧石器時代人は、日々の経験を積み重ねていくことにより、様々な道具とそれを作る技術を得ていった。それによって、自分たちよりも大きな動物に立ち向かうことができ、厳しい環境の中で生き抜くことができたのである。

このように厳しい自然環境であった旧石器時代も約一万年前になると終わりを告げ、次第に気候が温暖化していった。その結果、約六千年前頃を境に、海面は現在の海面付近まで上昇し、ほぼ現在の瀬戸内海の景観を形成した。

現在、二千年を超える鳥々が点在する瀬戸内海。その海底には、旧石器時代人の生活を解明する上での貴重な情報も今も眠っている。

ひょうどう、いさお「愛媛県歴史文化博物館学芸員一九七一年生まれ、東宇和郡宇和町出身。別府大学文学部史学科卒。『愛媛の押型土器について』上黒岩隆雄遺跡を中心として」(『研究紀要』第五号 愛媛県歴史文化博物館)

これらの多くは狩猟具や加工用具であり、島嶼部の遺跡で発見されている石器の大半はナイフ形石器である。このナイフ形石器は、小刀(ナイフ)の形をしていることからその名称が付けられており、石刃の鋭い縁辺を刃部として、それに柄を付けて槍先としたり、モノを切り裂く道具として用いていたと考えられている。これまで金ヶ崎遺跡においては、